



好類日記
家篇

3149
4



へ13
3149
4

耳ねもあろうと仰をねるふ。とく弾べて御
 むらせよとつ。小姐いた。愉眼して。ひたすら阿蘇次
 郎は春戀わたる。あまをなまきく。うらさ。顔うち額
 まろるときりた。たひねうちさ。いぎて。とらりく。あるさせ
 たまへ。とりあ。とばさへ。口ごも。まて。いと。はづ。う。げ。お。ま
 されど。な。母も。伴へる。一族の。奶々も。すく。めて。や。ま。ま。ず。
 其の時。小姐深雪。い。何う。い。志。ら。ず。了。眾。浅。香。ふ。叫。け。ば。
 浅香阿蘇次郎。が。膝。下。に。居。よ。ま。い。と。う。ら。う。お。る。扇
 子。が。さ。ー。と。た。あ。ま。ふ。も。の。か。い。て。た。ま。い。ま。さ。う。ら。へ。我
 かの。深。窓。の。こ。い。せ。た。ま。よ。ま。と。り。ふ。阿。蘇。次。郎。く。だ。ん。の
 扇子。が。と。ま。あ。ぐ。ま。ば。い。っ。ふ。も。姐。の。あ。ふ。ぎ。と。た。ば。ー。く。



阿蘇加保 卷之二

〇七三

玉手ふまきしうはる香の身ふまひばうまのち
まくうらたもてうちかへし。珍玩そび光輝奪目
銀地風もかとりぬそゆるふぞ。いふも仰まきせぬん
その料よいとままかくまき。菊の枝とりぬ弾せたまへと
いふせちよのそとける。小姐はやとら袖かとおひひ。形
同たとやどてくらへむ乳媪の真柴阿蘇次郎おひひて。
とがかとの姐々い。まだ羞澁深窓よーあまバ。おでう即君
たちの前よして容易まらべたまふべき。適間即君の賞ら
たまふぬる梅の香の歌よ。主母がちりごろ手ぬけけら
まてさうらいき。そい菊の葉とたふし調子なり各ますも。そ
の扇子の畫賛ぬかしたまへ。さあらバ換兒よして。主母お

も。秘曲ぬ弾てほのひたまへと。おとあふとぬとくひれ
バ。母刀自もまをぬるべかひやとら調子ぬ律よまらべかへて
いともしやさし死玉琴ぬ掻鳴しほ。操りける。了衆ども
ハ研あてがひ。往生をくぬぬ寫をまひ。顔またく火の阿蘇
次郎。今ハ推辞ん法もぬく。かの琴曲ぬ聞かがら。披らく
扇子小描し。たご一輪の朝顔よて。時よ名たぐる繪博士が
妙ぬはくせし筆のあと。阿蘇次郎も一時高興よまきせて。
ら路のひろよれあさうかぬてら次日うけのほま
ぬとふあひれ一村雨のちらうしとふまらし
とたぐをらし書くせま。恰好梅が香の曲もてけれ
ば。小姐いさらぬま。女房たちまぞて。まの扇ぬえる

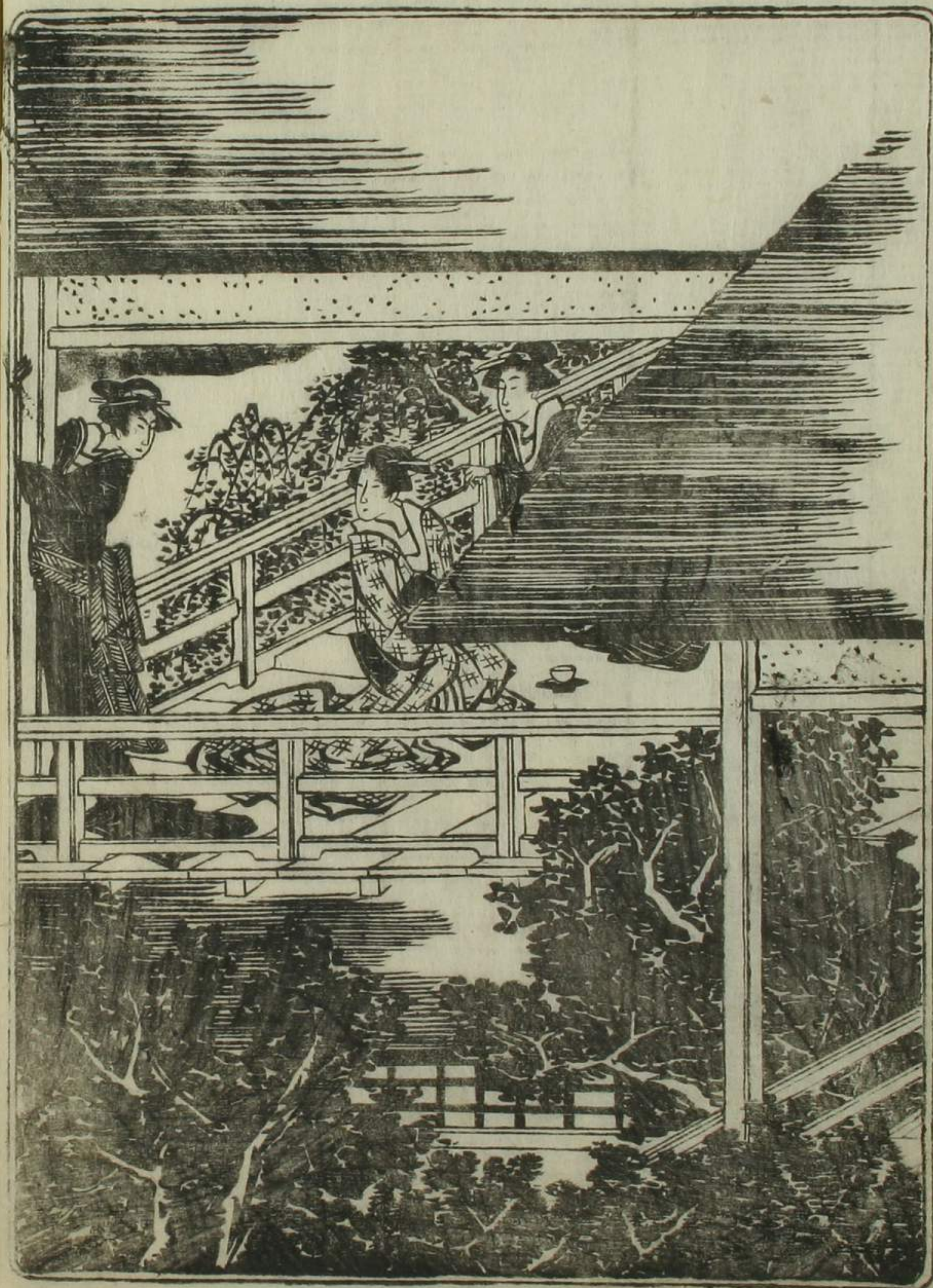
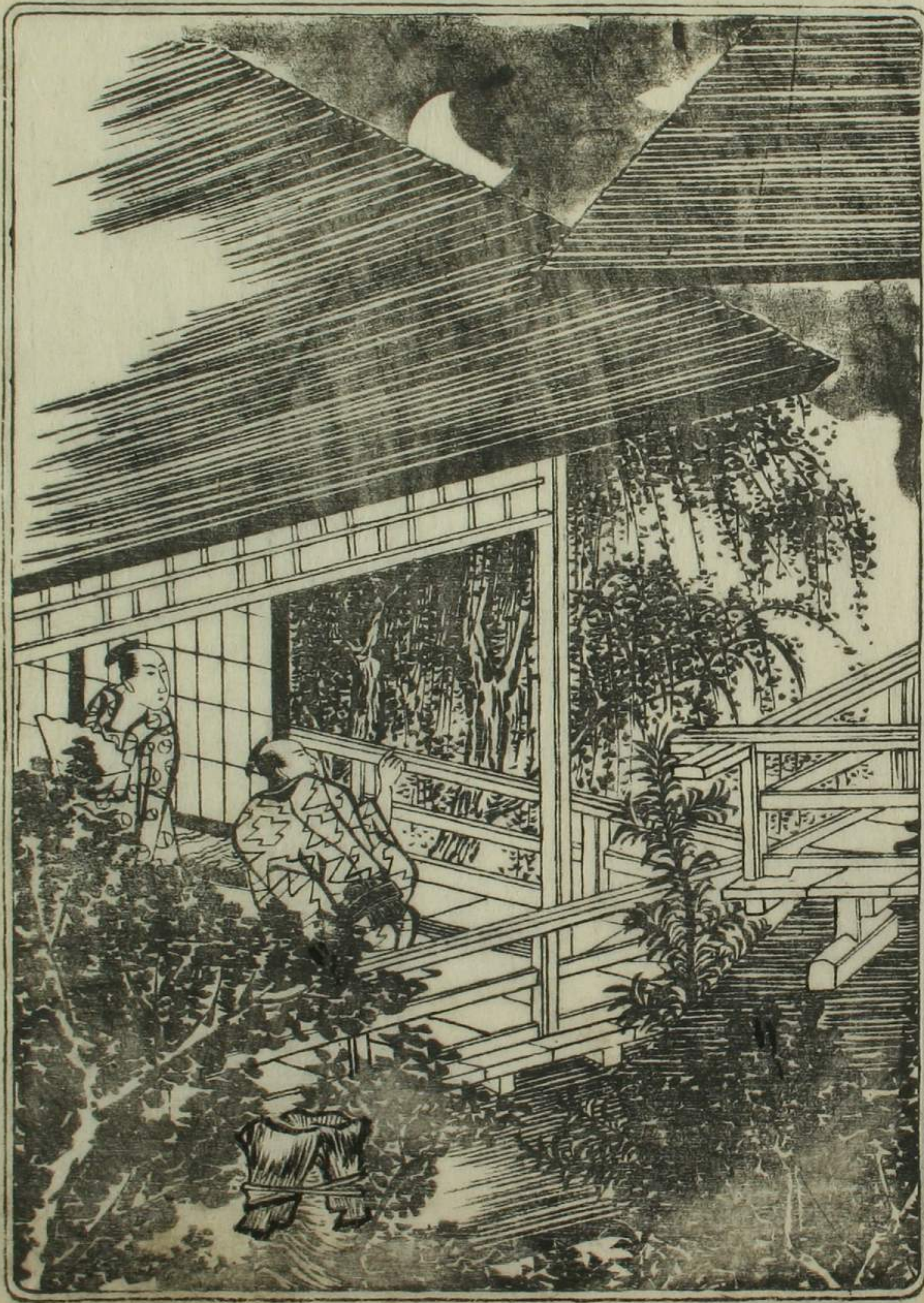
小歌のさまの古雅なるハ、催馬樂とやら人の調べよや。
くさ字様のうつくしき草の葉分よさむをゆくとの
水莖のよどみおく、いとつゆけくぞ見えおける。ひるこ
と小うち興して、阿蘇次郎もおほえ寸敷盃かかどぶ
け。微酔まきふ人々お向ひて。今日ハくらずもかく御
款待よあづかま。何酬べきよしもふるま。今その扇の
繪賛よ手紙はけ。はさふき音漆ときこえあけ。些の興
ともそへふんと。側よあまの蛇皮線かき抱き志し
調子の音どりして、やとらのどく弾くる。あまのゆるまの
あさうやなてらす日づけのつきふきあはを一むらさうの
くらしとふまかし。ととらへし弾うたふその声

妙よあはをねまきぐ人耳か側たて感よたえず。とどろに
涙とこへおぼしつ。やとらへしはらくとふまつし。まとう
ふ時。天も感應ましけけん。よふとの村雨とらし。と
うちとがち。水のく船の屋根よも音のよよと。あまの雨氣
人の肌肉ふまけていとすくまきあちよけね。ふの時
右左の障子かひらけ。とや黄昏の川面。數百千萬
螢火の乱を輝耀光景ハ。巷の説よいやまさとま。阿蘇次
郎屹とあつと。日も暮とて。婦人をかまのまの帯に
長居せんも影護たし。とやも衣紋かいつくうひ。竟
日の饗孤謝し。兩個の門扉かいろぐりたて。とくところ舟へ
乗うつま。人々名残かたしとける。こきて小姐ハ。清郎と。

今日半日の圓居して、こや十年も馴染しあつち、けし
 とうまていつの時心のたけぬありさんとせんをべも
 ぬきねもひして、秋水もうち潤うかゝとぬ、袖よ包めて
 浅香ぬよび、又もよくやく柳うけ、浅香はくやく心ぬ
 得て、乗後をたる筑八が裾ぬバひきとり、やよあの先
 生さまの御名ぬ、ちよとまよと記してたまはまきと筆と
 のべ紙手よ廼せば、筑八いよまよ書やまて、己が舟よ飛
 のてぬ、あの時満江一面の螢火よて、宛も白日の如く
 ふまバ、かの小姐いとのまよおほげえ、阿蘇次郎が影の
 かくろくまで、掉くだす舟ぬ見送り、とやもせつか小見
 えとまよ、遺る憾そのやるかとふく、おもひけそひてわそれ

かときふたけきあつち、いふとどふ志つり、阿蘇次郎の影
 の舟ぬ漕ぬけあつち、いづれも俗趣ふらぬいぬけまど、
 とや興盡ていそぎ前の橋語らうあつち、やぶて一個の逆
 旅店なたづねて、三個あつち、舎ぬあつち、かの沐浴ふど
 まつ、かくて檻よ靠て眺まよまバ、志のまよもとて、こ
 柳いらふぞあつちけるらうち、戦げる梢のいとあつち、やうふま
 了よたるふ、お馬東の山の端より、一輪の皓月さゝのぼる
 大車輪のよとく、その影一帶の大河よ映し、金の波
 さぐもたち、山色ハ霽々として、黛をかゝ、清風徐々
 吹ころり、白露江よ横たハ、涼爽あつかひ、かゝる乱ま
 ことをとて、秋の天かとぞおろし、さかか、縦横よ乱ま

逆旅の露
臺の三度
お子佳へ
あふ



の安たか傷 卷之三

の安たか傷

卷之三

こびりふ百千點の螢火も其の一痕の月のためまたちま
 ちよ失ひ奪ひも。さらかへりたる風景のまゝと眼ごま
 まく趣きあるふぞ。ひたをら飽ず望居り。隣の架
 棚も女の声いとかいぐま。筑八ハむく洗けよも
 さーのぞけべ。ふねと見入たる女の顔は月光よ
 ぞうせハまぶべくもぬれ前の了衆ふとありぐる筑
 八北叟嘆いてまいまと這里よても不思議は環會
 へべとといふ。了衆淺香あまかき。けよ前の風流客
 ふてねいした。師の即しまをとらめよろしくやうとさせ
 まへ。かろふとふしあらば。一つ房は舎ねんものさといひ
 さしけり入る。やがてまゝ出来たり。欄干はよちて

這方の内は張き。半身はあらハ。諸郎はまふ在り。
 明なびとが。かこさまの人。石山へ請で待るぬ。諸君
 ふも伴ひたいてんやとり。忠吾筑八ハ渡頭は船のりら
 まで。雀躍はくさうぬく諾ふ。明日の約束とぞねく
 かくてとのし。臥房は入りぬ。宮城阿蘇次郎はまど夜
 深さに趣出。二個の門弟は汰おこせ。筑八忠吾目とす
 りく。みや隣り。誘来里しやと問よ。阿蘇次郎
 いへらくまがらす。いそぎ都下へ歸んか。いどたまへ
 とせ。またつむ。兩個ハあまを聞て。大よ不興。霄よ
 約せしふともあま。今日ふんかの美人たち。石山ふ
 りちほむ。昨日よまよと。至て有趣かるべ。先

生よも。今一日まけて、吾傳と閑要せたまへと。ひたす
むとど。阿菴次郎頭がうちふりて。歡樂ハ時が得て極
むべし。窮士ハ寸陰が惜むべし。その情といまむまは
忠吾筑八ハせんをべふく。ふりく望が失ふひて。志ふし
師匠の跟よはき。都がとて。四里はふ。

六回 敵

宮城阿菴次郎が、鬼道の川舟よ奇遇に。女房たちの
素姓が委しくたづぬまは。筑紫ぬる。大宰小貳殿の浪士
秋月弓之助が宅眷なま。弓之助が渾家と水青といひ
女兒が深雪とふん喚ける。那の弓之助國が挂冠此の
瓜葛と托きて。洛陽よのぼま。園崎村よ隠を挿ぬ。弓

之助生得て。その相貌堂々文武の才が無全剩へあのが
名よあめて精兵の譽世よ高し。本國筑前よ在ましと死ハ
大宰家よ仕へて。二千八百石の秩禄がとま。一隊長とほと
しとぞ。もとより大祿の餘光よて。かく陸沅の身小殿ま
ても。緊く内福ぬる過活よて。夥の婢僕がも使ける。昨日
ハ箸饗家の雜色なる一族の内室とも誘ひて。宇治の螢
見ままひ。了たるふま。さてあの弓之助が退仕したる縁故と
つひのまをよま。と死。大宰家の健卒よ。足柄傳藏とつひ
とのあま。渠が一個の妹よ和蘭とて。天賦ついたる雪落も
の。もとより八九分の顔色あり。あの和蘭への比よま。う
たふし。藩中の騎士。花園山十郎と密通がふし。その

家もと負かすけをば、山十郎とてふふまで些の人情と
使てそつぎける。傳藏ハもとよも不良ものふまバ自己
が榮利が貪りて、蘭が山十郎と通ぜいふといまうず顔
ふぞうちをぎける。阿蘭ハ形のおとそ、淫婦よてまた
志も小野右近といふ武人ふも契がこめて、ふくいひかハ
せしうば、那の右近おらんが色よめてまどひ、ふまを百年
借老の老婆よせんと、門戸不對姻姪ふまバ、や乾又と
いふものをあしらへ、いまく傳藏とも量て、程ちうき小迎
娶んと、その支度とをいそ死ける。花園山十郎その催と
聞とひとしく、勃然として震怒、傳藏がせめきたつて、た
蘭いせいこがひとへ、やうしうけをバ、八幡武士道たちが

たしと。さんぐふいひのまゝ、右近いまと約束せしこと
といひ、とまきかくまも、蘭のこが妻おと、双方ますし
いひつのも、とあらバ刃銚よて取て見せんと、共、意氣地
なたてぬく小ぞ、また一死旁輩ども、三四十人斗はくも、
互ひよ荷擔がかり、向敵手と討果し、蘭がうむひて
立退んと、晝夜兩家よりち集ひて、今や切ていでんと
辨めきける。老分の人々中、ふ入、癢ひ見もども、ふのく
馬耳風よ聞かし、咄嗟大騒動よあよバんとす、その比
筑前の國主、大宰小貳殿御他界ありて、世子龍壽丸
君いまだ幼少にハ、けるや、賢女のをとこえある後室
紫光禪尼、簾子たきて、政がきうせらとぬ、尼公よといひの

淫婦阿蘭
 花岡山十郎
 小野石近
 討果さん
 友方荷槍の
 人ありて大
 騒動小及び
 けり秋月
 引之助當光
 禪尼の令と
 うけこれと
 濫む



安政が代
 春七三



安政の代
 春七三

〇廿一

騷劇とふくおどろかせたまひ。物馴てうめぐり死
ものかまばとしていそがしく、秋月弓之助が、釣座は呼
出さま。今度の騷動、汝が隊下のものおほいとまきく
いちやくその場はむね向ひ、無事よとてまづりよと
の上意おぼし、弓之助か、まよとて、直に馬を飛せて、
闘争の場は馳ゆきける。おの時双方白刃がうちふて、
己は巷の戦はたよじんとして、弓之助は馬を真中よ
のまはけ、後室よまのづうて、背よとて来し御家の令
旗はぬきとつて、前後左右は磨ぬき、上意しと呼は
ける。おまは見て、さしとよ乱れさへげら、徒黨のもの
ども、たちまち颯と、東西よものこりて、各く地小

ひさまづきて、今なきく、弓之助馬上よ大音上、御
幼君はかいかさろふし、譜代恩顧の身分として、上の御
為はかへまえず、私の遺恨よまよとて、おのぬらぬ一命
が果さんと、重々の不忠おぼし、きつと先非は改いべし。
まつと傳藏は、蟄居まうし、はけ、蘭ハ尼とふし、一生
縁付はゆるとず、かくまをば双方の武士はたちふん、御代が
いらの初めなまをば、おのたびの罪は問をず、寛仁の御制
度はかたどけぬおとしひ、とまやうよ和睦はかして、
おまよと忠勤はくげまへと、上意と称して諭しける
小ぞ、山十郎がとも、右近がとの荷擔人も、ふりくその道理小
伏し、且尼公の御仁心は感し、蘭はまきりく仰付らる

うへは、こましくべちふ夾こむべき意地としてもさうらはず
 と、さしもの乱逆たちどころ小志づまを、全たく弓之
 助が一時の機變小よるものぬき、かいて弓之助登城さ
 て、おのよし後室へ伏票あぐと、紫光禪尼御感ま
 さまし、御褒賞あてて、祿あまたとらせたまひぬ、その
 後世子龍壽丸殿御元服あらせらま。累代の箕裘と
 ほご、故のぶとく、大宰の小貳に任ぜらまたまふ、おの
 新小貳殿一日鷹野に出たまひ、一陣の雲が志の
 ばんと、こづらふあてあふ、三四人の近従のそが志たぐへ
 御手小鷹が居とせらまて、とある菴室よ入らせたまふ。
 小戸ぞぬ裏頭よ、田廬の茶ふきふがまて、あるどい

いづちへ行けん見えざまけり、小貳殿主従ハおの庵の作
 椽は尻かけてやとらひたまふ、とらうら雨も小やまて
 雌手から山脚よ、袖笠して下屋来たる、いとら
 ころに女僧ぬる、御佛へ供へんと小や、寒菊山茶花か
 どと、いとたる阿闍桶と手小さげつ、おの女僧督と
 見らよ、こが庵は息ひたまふ御方、さしけたり、御打
 份お正しく國司よと猜せ、うら、あたふと垣根よつく
 こいける、小貳殿ちらと見たまひ、うら、ふうく懸想ま
 さまし、やとらたち来て、かの尼が側よちうよまたまひ、
 面をあげよと仰をるよ、女僧いとこづか、けよ、顔
 をこいあげて背向へる、そのさまふど、王が欺むく

ばう了れ了。梨花一枝春雨似帯と云態よていまの雨
小そがぬまをてあいま小たとやさたるそのすぐと墨のこ
ろも綾錦よ了媚きた了。小貳殿名はねよと云と
問はせたまへば。惠春と申世捨人よとべるといらふ殿の
御還るこの道くも近従よかたらせたまふハ惜べし絶
代の佳人よの草莽よ埋りてんふと云。さる小てもか
かる美人のいうねる由へ小尼といふといふうさよと
心あまげよのたまはとまば。かひくくせつきたる。御供の
うら小知人のあてて。あまふその足柄傳藏とようと徒
卒が妹よていと聞あげたる。殿うかづせらまて。それハ
ふそ往年大乱のとてい。いうねる女よ一あまのまうく

騷動よかよびしごと久しく不審くまどてししがあま
不どの標致かまびさあてしし理よよと。いう慕し
ねほしける。やうてかの惠春ハ帳内小ゆさせたまひ。たぐ
小還俗させらまて。とこの名小あらためさせ。御側室とい
しはつせたまひける。外面似菩薩内心如夜又と説を
たるがふとく。よの和蘭の方顔むせのあてねる小ハ似げ
かくも。その心いとふどろくま。奸才よと類。かうてくれ
が。佞媚ともて君の心ハ蕩うしたてまは了。ひとを寵愛
が専小せしうべ。殿ハ何とがふして。おらんハ悦ばせんと。
いちやく傳藏と擔擧あてて。側執事とねとせしめらる。
傳藏もよ了。梟獍なるものねとバ。己よ誼らふものハ

古今和歌集

四七

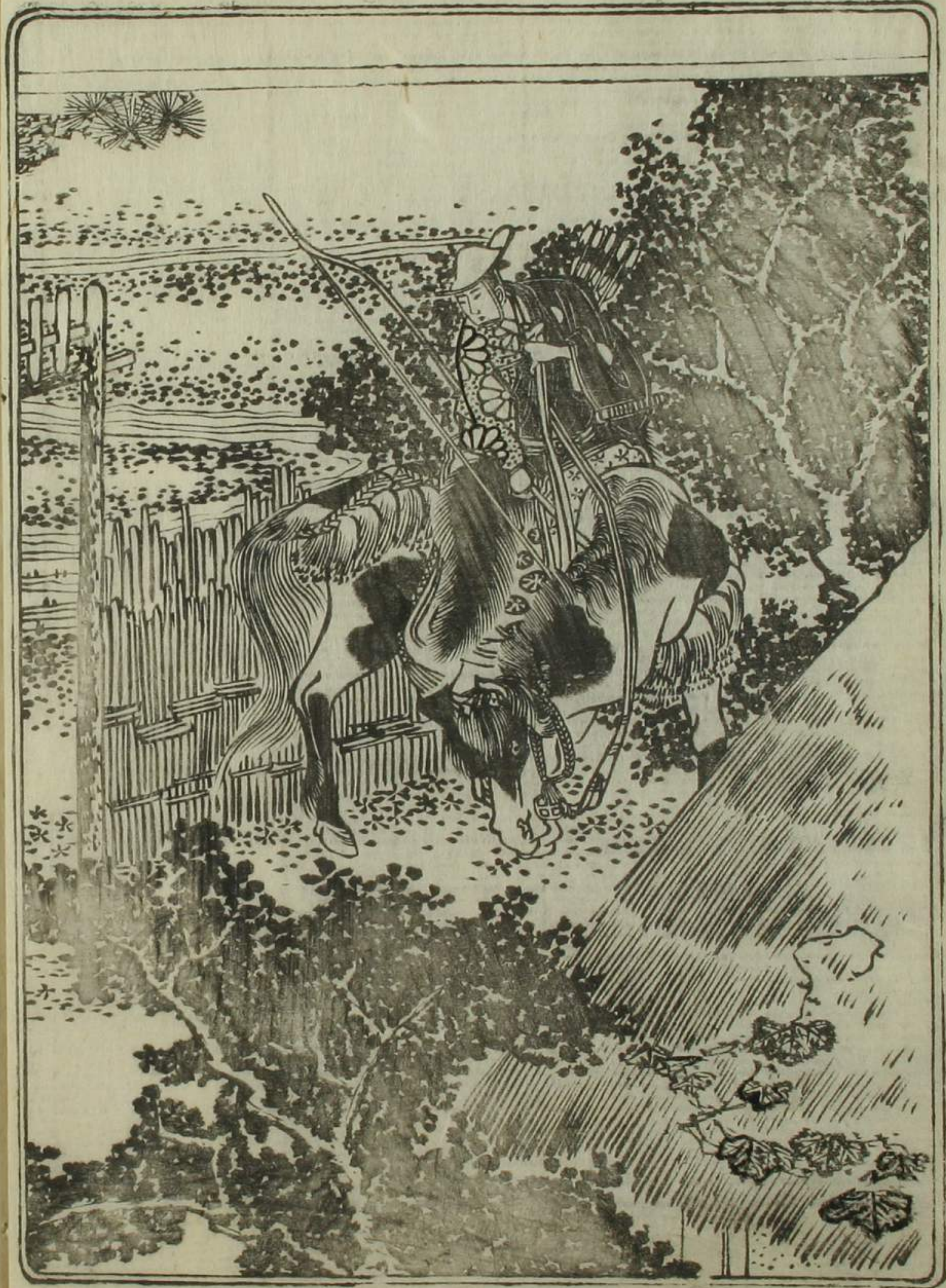
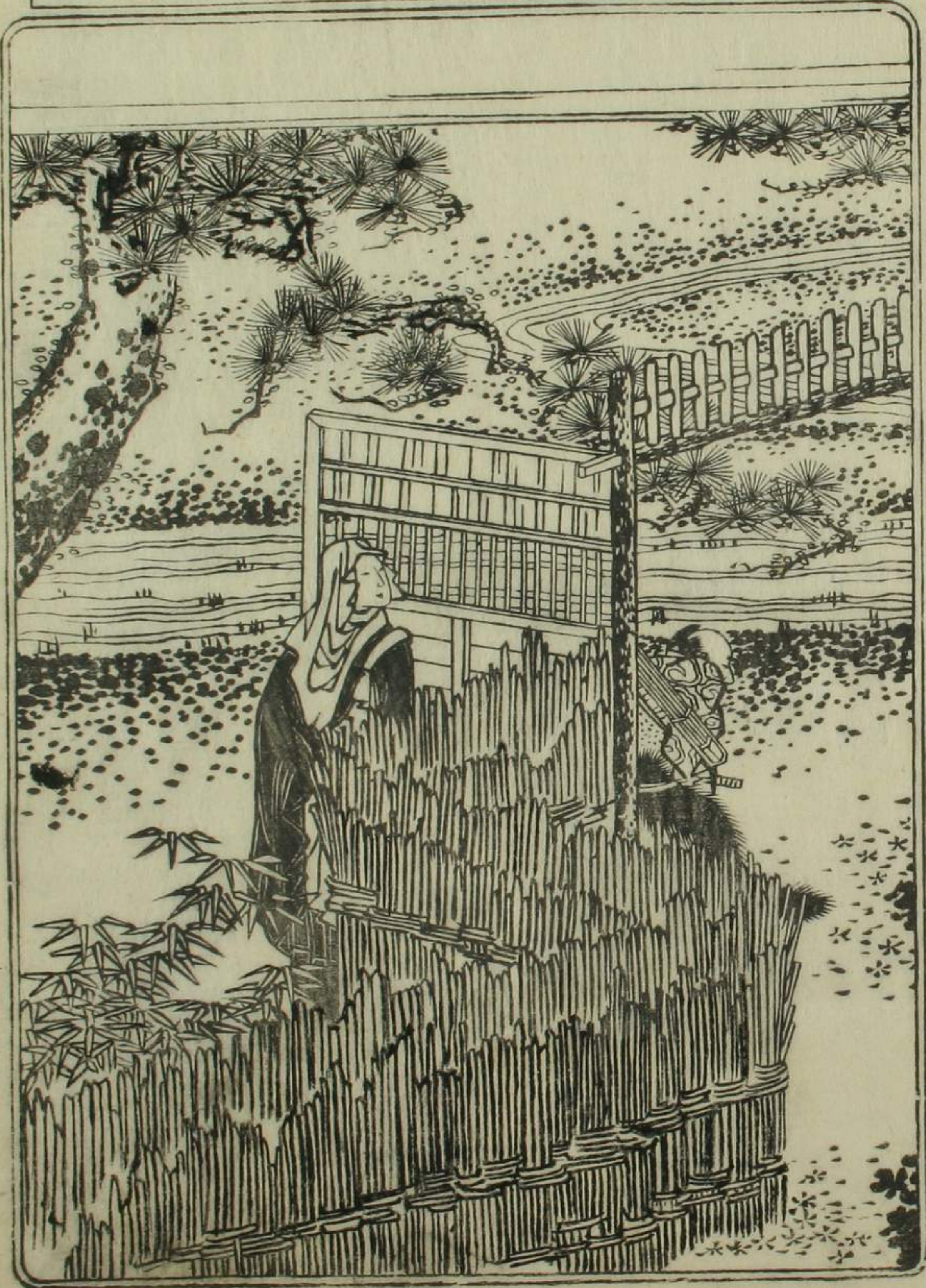
凡

瞿負して首尾をほくろひ、骨鯁の人瓜仇讎のふとく
忌憺ふまが諺瓜かまへある罪よおとし、ある黜ぞけ
まうべ、世よほろし、小人の習俗か足、未の傳藏、當路
小希旨、榮利と得んと望むものも多かり、ふくよ、芭
虬太夫として、一千石の祿瓜給はる、未も隊長瓜勤り
まが、一子虬之進がたゆよ、一個の美女瓜もとめて、ま
まが、新人よせんと、多方心瓜費せし、ある氷人ま
たる、足下のもとりた、ま、注文よかかひたる風流女こ
そ、いあんかま、秋月弓之助が女兒深雪といふもの、未を世
ふとぐきたる標致かま、鉄の鞋と踏破て、日本國瓜搜し
もこむるとも、ふまより外ふ、いあるべうもか、いと、いと、はあ

まうふとく、わけま、ま、虬太夫父子、いその人からをめと
よ、見もし、聞し、せ、い、あへ、頻、又、懇望、よ、お、い、ひ、氷人
ま、て、秋月家へ、い、い、入、ま、ける、よ、實明、緊、の、弓、之、助、ヨ、比
色、親子、が、ひ、と、お、王、瓜、悪、ま、且、その、門、風、瓜、も、い、や、し、ま
居、ま、ま、い、う、で、た、や、ま、く、氷、人、が、花、言、巧、語、瓜、う、け、ひ、く
べ、ま、百、般、事、瓜、虚、托、て、固、辞、と、ぞ、い、ひ、い、か、ち、ける、虬、太、夫
ハ、ふ、ま、ま、ま、ま、の、や、ろ、か、た、か、く、暗、算、や、が、て、當、時、日、の
出、の、足、插、傳、藏、ま、し、ま、入、重、く、賄、賂、瓜、か、し、ま、ま、く、追
統、て、殿、の、御、聲、が、ま、と、ね、う、ひ、秋月、が、女、兒、瓜、ま、ま、ま、ら
妻、ま、仰、け、け、ら、る、ま、や、う、凜、が、執、成、と、ぞ、た、の、ま、ける、太、宰、の
少、貳、殿、ハ、傳、藏、が、つ、ま、ま、ま、う、て、即、日、秋月、弓、之、助、色、虬、太、夫

少貳殿ハ傳藏ガツママウテ即日秋月弓之助色虬太夫

大宰の小倉
 廣隆鷹野
 小出てとある
 庵室の雨や
 どりて女僧
 惠春の懸
 想たたまふ



大宰の小倉
 廣隆鷹野

廿五

と召せらと。汝等ハ似合ぶろの男女の児どもハ持たるよ
し、門戸も相應ふと。予ガ媒ハとるぞ。いとさ日とあら
きて。姫儀ハそのへあうるべしと。雷霆撃の嚴命よ。虹太
夫ハよろみべども弓之助ハハツト。たもひ。もとよ。心よ
ハそまねども。君命ハるむよしもく。その座ハまづ御請
ねふして罷出ぬ。弓之助とぶく私邸へ回す。快
快として樂まど。渾家の水青ハ氣ハいたり。御顔
色の常ふらぬバ。いうぬる怯事ハ侍王と。女児も
ろともたづぬま。弓之助ハ數回歎息し。新君色よ
既して。佞人ともうげけたま。そヤ當家も未ふる王
た。足柄傳藏先年の事ハ意趣ハ合と。とりよふま

て我をとづり。そのうへ腹あした。芭虬太夫と執
持上意ハ借て。好まざる婚儀ハかこしむるま。とて
かまがとらひ。ひよよも。よことハ奇恠なり。國道ハ
時ハ去ると聞い。ざや暇ハと捨よして。片時もくや。く
たちさるべしと。ほもる憤鬱ハあうし。けま。渾家の
水青も。良夫の肚裏変せしと見て。けま。あわても。諫
めず。密よその支度とどふしける。一日秋月弓之助ハ。月
番の家老の郎。いた。一通の封章ハ。玄關よこし。と。死
古實のおとく。隊長の備正し。鉄鉈と。火繩のもの
と。左右ふうたせ。家春ハ後陣よか。ハせて。まづくと
瀧臺ハ起程ける。殿ハ弓之助ガ封章ハ御覽とる。心

己が不足歎いひからべ、押て暇をと捨し、言語道断の
 曲事かると、以ての外は怒らせたまひ、追手をかけよ
 といとまたたまふと、御母堂紫光禪尼慌て、殿がなだ
 め、漂が奮功どもお叙らして、こゝろおくとおめたまひし
 のへ、弓之助ハ事故なく、筑前の國なひらきとて、家眷と具
 ちて、夫の京よのぼり来たて、今の岡崎の莊院に購得
 て、移し拙てぞ居た上ける。あまはこれ前の話なりども、
 因およきてあつふまらぬ。

阿佐加保日記卷之二 終

